
研究ノート

文化財保存をめぐる二～三の問題

杉 本 尚 次

1. は じ め に

わが国の文化財は現在重大な危機に直面している。とくに開発にともなう埋蔵文化財の破壊は点から面へと拡大しはじめている¹⁾。また過疎地域における民俗資料も急速に消滅しつつある状況である。これは巨視的には経済成長政策に伴う地域開発によってもたらされたものであり、新全総から日本列島改造論へとますます文化財破壊の傾向は強まるものと思われる。

1972年ハンガリーの首都ブダペストで開かれた国際記念物・遺跡会議[ICOMS]—International Council of Monuments and Sites—の決議は「歴史的環境は人間環境の基本的要素である。一方都市化現象は今後ますます加速されるであろう。これに対応するには、歴史的記念物を過去・現在、将来を一体のものとしてとらえる視点に立って取扱うべきであろう」としているように、歴史的環境、換言すれば広義の文化財の破壊は公害や自然破壊と同じ人間環境の重要な問題としてとらえるべきであり、世界的視野で文化財保存の問題を考える時にきているのである。

わが国でもようやく文化財に対する保存の重要性が痛感され、一般にも浸透しはじめているが、その間にも文化財は破壊されつつある。文化財は有形文化財〔建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、古文書その他の有形の

1) 文化財保存全国協議会編：『文化遺産の危機と保存運動』（1971、青木書店）

文化的所産でわが国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの及び考古資料〕(2)無形文化財〔演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産でわが国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの〕(3)民俗資料〔衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習及びこれに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件でわが国民の生活の推移の理解に欠くことのできないもの。〕(4)記念物〔貝塚、古墳、都城跡、城跡、旧宅その他の遺跡でわが国にとって歴史上又は学術上価値の高いもの。庭園、橋りよう、峡谷、海浜、山岳その他の名勝地でわが国にとって芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物、植物、及び地質鉱物でわが国にとって学術上価値の高いもの。〕に分類される²⁾。

ここでは民俗資料に含まれる家屋（民家）と民俗行事などをとりあげ、文化財の研究調査と保存の問題を考えてみようと思う。

2. 野外民家博物館と街区保存（町ぐるみ保存）問題

～ヨーロッパの事例を中心として～

家屋に関しては庶民の伝統的家屋である民家について調査研究が進んでいる。とくに戦後建築史学の努力による復原と編年の導入によって研究は一層深まっていった。しかし建築史学のみでは単なる建築構造上の解明にとどまり、そこに住んでいる人々の生活やその変遷、建物をとりまく環境などの問題が軽視される傾向は否定できない。したがって近年は民俗学、文化人類学、地理学、考古学など多くの隣接分野の協力、資料の交換なども行われはじめている。

民家の文化財指定は戦前は僅かに大阪府の吉村邸と京都小川邸（二条陣屋）の2件であり、純粹の民家としては吉村邸のみといってよい（文化財約1000件のうち）。大半社寺中心であったことが判る。しかし最近文化財概念の変化もあり、ようやく民家の文化財指定が増加してきた。

2) 文化庁編：『文化財保護の現状と問題』（pp. 4—11, 1970, 文化庁）

文化財に指定するためには綿密な調査研究が必要である。昭和37年から文化財保護委員会が指定保存を目的とした緊急調査を計画し、予算も認められ、都道府県別の民家調査が開始された。昭和44年には指定民家93件、167棟に達し、調査完成時には250件にのぼるものと推定されるに至った³⁾。

民家の保存対策としては民家博物館の建設が一つの有効な手段であって、わが国でも豊中市服部縁地の日本民家集落博物館、川崎市の日本民家園、金沢の江戸村、各地の風土記の丘など続々と建設されている。また個々のものだけでなく、奈良県橿原市今井町、倉敷市、萩市、高山市など町ぐるみ、あるいはその一部を保存する街区保存の問題も注意され、中仙道の妻籠宿ではすでに町ぐるみ保存が実施されている。なお博物館や街区保存地区など（埋蔵文化財では著名なもののみ）がクローズアップされ、その他の多くの文化財が失なわれていることを無視してはならない。

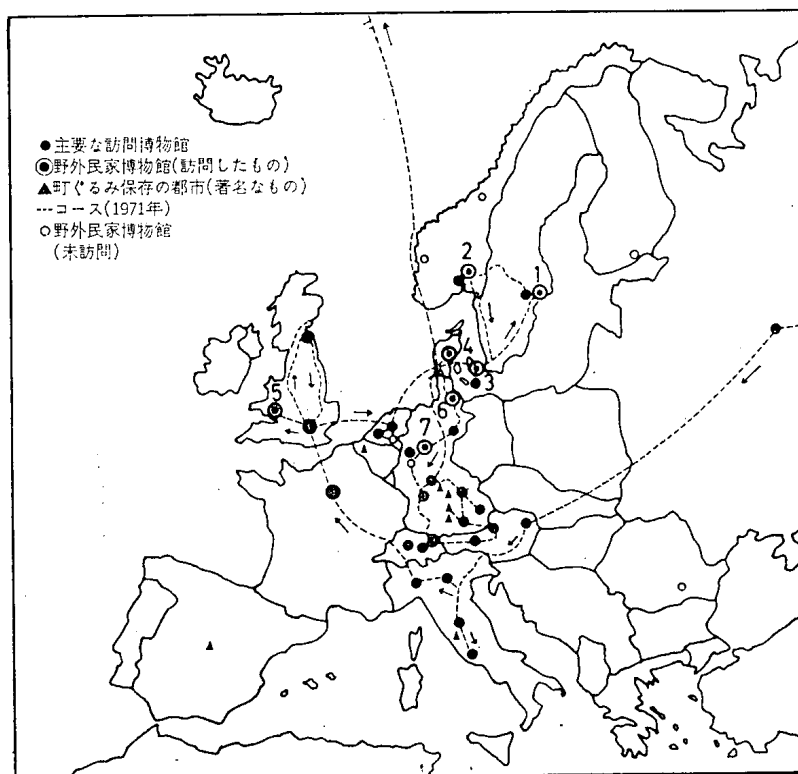
これら野外の民家博物館、街区保存はヨーロッパでは早くから着手されており、庶民の生活文化を展示した民俗学、民族学博物館にも優れたものが数多い。そのうち昭和46年訪問したものを事例として示してみよう。

2・1 ヨーロッパの野外民家博物館

ヨーロッパの野外民家博物館は、スウェーデン（ストックホルムのスカンセン）・ノルウェー（オスロのノルウェー民俗博物館、ベルゲンの古い町、トロンハイムの民俗博物館）・デンマーク（コペンハーゲンのフリーランド・ミュージー、オーフスの町屋の博物館）など北欧に比較的多く、ドイツではキール近郊のシュレスウィヒ・ホルシュタイン野外博物館、ウェストファリアのビーレフエルト民家博物館、ボン近郊のコンメルン野外博物館。オランダではアルンヘムに民家博物館がある。イギリスではウェールズのカージフにあるウェールズ民俗博物館が知られている。東欧ではル

3) 鈴木嘉吉：「民家の修理復原」（『建築と社会』50. pp. 46—48, 1969, 日本建築協会）。

ーマニアのブカレストに村落博物館があり、規模の大きさでも著名である。このうち筆者の調査したものについてとりあげる⁴⁾。



第1図 野外民家博物館分布図

2・1・1 スカンセン [Skansen]

ストックホルムは美しい氷蝕入江と島々からなるが、スカンセンはジュールゴーデン島にある。島全体が一つの小山をなしている。スカンセンとは、小堡壘の意味で古くは「とりで」があった。スカンセン博物館の創設者はアルツール・ハーツェリウス (A. Hazelius) であるが、彼は19世紀後半の工業化、文化遺産である古い建物の減少傾向を嘆き、1872年から民族学的遺物、古い家具、衣類など物質文化を保存する仕事を開始したのであ

4) 杉本尚次：「ヨーロッパの野外民家博物館訪問記」(『季刊人類学』3—1, pp. 186—208, 1971. 社会思想社)。

杉本尚次：「ヨーロッパの民俗学、民族学博物館を訪ねて」(『沢田博士記念文集』所収, pp. 50—57, 1972)。

る。そして1878年パリの万国博で伝統的な服装，古い農家の室内の展示などを行なった。これを契機として住居を移築する方向へ進み，一般公開を目指して準備が行なわれ，世界最初の野外博物館として1891年に開館したのである⁵⁾。

博物館の敷地は広大なもので約9万坪あり，小山の大半をふくんで起伏あり，池や森もあって優れた環境である。スカンセンは早く澁沢敬三先生が訪ねられ，今和次郎先生も1930年にこの地を見学されるなど，わが国にもよく知られた野外博物館である。スウェーデン北部・中部・南部の木造を主とした（丸太・角材の校倉式，厚板式）伝統的民家が集められ，（写真①）中庭を囲む家屋の配置が南部ほど閉庭的であって，デンマークの民



写真① スウェーデン中北部の木造校倉式民家と民族衣装の係官
（スカンセン）

家との類似性がみられる。屋内では民族衣装をつけた係官（娘やオバさん達）が火を焚き，毛糸をつむぐ。生活のある生きた民家を人々に展示しているわけである。塗料をぬった富農の家は閉庭に近い中部スウェーデンの形式で屋内は3～4室に仕切られる。大きな木の机，椅子，炉，冬の長い生活がしのばれる。北部の高倉やラップ族の小屋。中北部山地の夏の牧場

5) 浅野 清：「北欧の民家博物館」（『民俗』28，1964）

小屋やバター・チーズ小屋で働く民族衣装の娘たち。乳牛が草を食み、トナカイもいる。リス、キジなども放し飼いされている。民家のほか町屋、鐘楼、教会なども集められ、年中行事、風俗、ダンス、劇、国際日などの会合も行なわれる。動物園、遊園地の設備もあって市民の憩いの場となっている。年間入場者 200 万人以上と云われる。すでに19世紀からこのような文化財保存への動きが活潑であったことに敬服する。

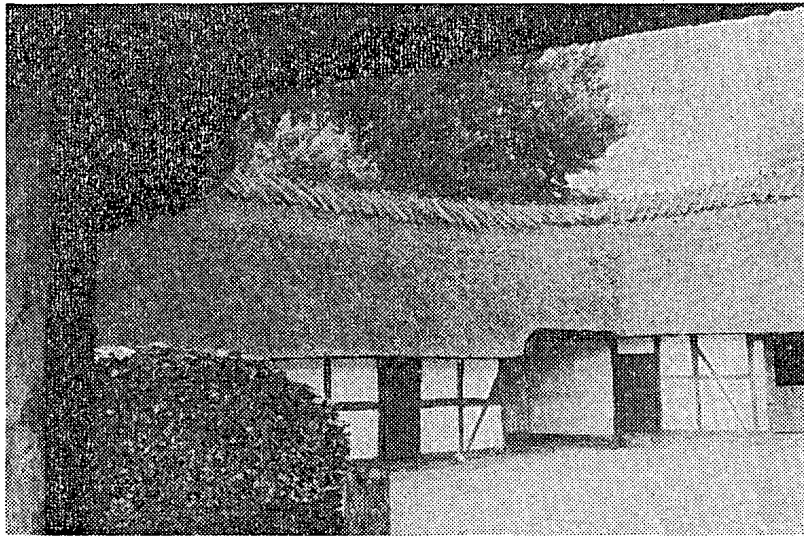
2・1・2 ノルウェー民俗博物館 (Norwegian Folkmuseum)

ノルウェー農村の一地帯には窓枠などを白く塗った民家が車窓からもみられるし、丸太式校倉組の民家や倉も散見される。ノルウェー民俗博物館はオスロのビーグドイ地区 (Bygdøy) にある。オスロは細長いフィヨルドの最深に立地し入江が多く、ビーグドイは半島になっているので船で渡る。ノルウェー民俗博物館は入口を入れて室内展示場の建物があり、その背後が奥深い森で野外民家博物館となっている。1894年頃から Hans Aall などによって準備され、1902年開場している。小屋まで含めて150棟の建物があり、ほとんど木造で、主として17世紀以降のものが多い。針葉樹の森の雰囲気があり、かなり起伏もある。野外博物館の中では最も森林的な景観であろう。民家はノルウェー各地から集められ、地方別に小広場にまとめているが、新しく拡張した南部よりの地区は道路に沿って配置してある。小寺廉吉教授（前桃山学院大）が1927年にこの博物館を訪ねられた時には現在の2/3位の広さであったことが当時の案内図と比べて明らかである。主要な家の内部には民族衣装の娘たちがいて説明してくれるが、数戸のみであとは締まっているものが多い。木造でもスウェーデンのものよりやや粗野な感じである。木材は丸太、角材、厚板など多様で校倉組が多く、北欧の伝統的形式である。北端近く12世紀のスターブ式の古い教会があり、丸太を組合せて作ったノルウェー独特の様式美をみせている。室内展示場にはノルウェーの農村や都市の民具など物質文化が並べられ、ラップ族の資料も豊富である。文豪イプセンの書斎の復原されたものも見逃せない。

2・1・3 フリーランド・ミュージー (野外博物館 Frilands Museet)

デンマークの野外民家博物館はコペンハーゲン北郊リングビー付近にあり、デンマーク国立博物館分館である。面積は88エーカーでスカンセンよりも広く、起伏が多少ある広大な敷地に森や並木が配され、環境づくりに工夫をみせる。1897年に小規模なものとしてスタートしたが、現在地にあった農科大学の移転を契機に大規模な民家博物館建設を計画し、1935年から移築をはじめた。民家はデンマークと旧領域のスウェーデン南部、ユトランド半島に隣接するドイツのシュレスウィヒ・ホルシュタイン地方などから集められている。案内図でみると、建物は34棟で農家が多く、漁家、風車、水車、工房、消火庫・乾草小屋、倉庫などが含まれている。建物以外に境界石、道標、橋、村の集会広場などがある。番号が74までつけられ整理されているが、欠番号がかなりある。これは将来の購入増設する建物のためと、地域別に配置する関係からである。現在建物配置に疎密があるのもそのためであり、余裕をもった大計画と云えよう。広い博物館の中から2～3の地区をとりあげてみる。博物館の入口近くに比較的建物が集まっている。シエラン島から移した風車、ローランド島から移された草葺または葺葺寄棟の民家は居住部分と家畜舎の部分が結合し曲り家風になっている(一棟集中型)。コペンハーゲンのあるシエラン島とユトランド半島との間にあるフィーン島から移された民家は豊かな農家で、中庭を建物で囲む形式(閉庭型)が多い(写真②参照)。この型はデンマークからスウェーデン南部に分布しており、この博物館にも類型が6棟ある。ハーフチンバーが多く、壁は日乾煉瓦、煉瓦をつめたものが新しい形式であり、白漆喰をぬったものもある。古くは網代に小枝をあんで粘土をぬったと云う。屋根の棟部分に素朴な干木のような棟おさえがみられる。

野外博物館のやや北よりに広々とした野原があり、ここに巨大な草葺屋根がそびえる。ドイツのシュレスウィヒ南部 Eiderstedt から移された民家である。この民家はドイツ古民家集⁶⁾にも収録されているもので1653



写真② デンマーク フィーン島の民家（閉庭型）

年に建てられたことが南側小切妻部分に記されている。

Eiderstedt 地方は北海に近い低湿地であり、屋敷地は盛土されているものが多いが、この博物館でもほぼ低湿地の環境をつくり出している。この大屋根は44フィートあり、中央部分は穀物用納屋、その周囲は居住、脱穀場、家畜舎（馬、牛）を配置する。この間取型は北ドイツに特有な低ドイツ型の一様式フリース型で、大屋根一棟集中型の典型である。フリース型は北海の海岸線に沿い、オランダから東へのび、シュレスウィヒ・ホルシュタインの西岸低湿地と島々からデンマークにおよんでいる。

ゆっくり見学すれば一日以上かかるであろう。各棟には係官がいて親切に説明してくれるし、定期的に馬車も巡回している。曜日や時間によって民族舞踊、粉ひき、羊毛刈り、紡ぎ、染色、手織、レース編み、コハク切り、陶器づくりの状況を見学させてくれる。農家を中心とした純粹の民家博物館であって、これからこの広大な敷地に一層充実した民家博物館が作られるのであるから、まったく羨ましい限りである。なお豊中の民家集落博物館はこの野外博物館の1/10程度の面積である。

6) K, Thide. 『Alte Deutsche Bauernhäuser』 Die Blauen Bücher. (1963)

2・1・4 オーフスの古い町屋の博物館 (Den gamle By)

コペンハーゲンの野外博物館が農家を主体にしていたのに対して、デンマーク第2の都市オーフス (Århus) には Den gamle By (古い町) という町屋の博物館がある。オーフスは人口13万、立派な町並、市庁舎から西北に大通りを約10分ほど歩くと植物園の一面に野外博物館ガムル・バイ (古い町) がみえてくる。53戸の古い建物がオーフスとアアルボルグから



移されており、都市文化の歴史を一般に理解させることを目的としている。ペーター・ホルム (Peter Holm) 博士の提唱で1914年美しい市長の家が移築されたのを皮きりに古い町屋が集められたのである。(写真③)。

入口は古い劇場で切符売場に利用しており、道路は曲って多少の起伏をもつ。大通りに沿って小川、池が配される。市長の家の前は広場になり、16～18世紀の住宅、商人の家、醸造所、馬具工場などが建つ。小都市風に町屋が

並べられ、染物屋、薬屋、帽子製造、ポンプ小屋、桶屋、タバコ工場、水車小屋、郵便局など。中には地方史料のコレクションを展示する家もあり、その他パン屋、時計屋、鍛冶屋など多様である。木組の美しい赤瓦葺の家が多く比較的小面積にまとめられている。

2・1・5 ウェールズ民俗博物館 (Welsh Folk Museum)

南ウェールズの重工業都市カージフから西へ6 軒半の丘陵地にセントファガンス城がある。この城は典型的なエリザベス朝様式の館をもち、数々の調度品が展示されている。この城の庭園と広大な敷地がウェールズ民俗

博物館である。ウェールズ各地の古民家を集め、最近モダンな展示館も完成し民具などウェールズ人の日常生活、伝統的生活を示す物質文化が並べられている。現在、移築された建物は11棟で農家が主である。

草葺（小麦稈）でハーフチンバーの民家と石造壁面で屋根はスレート葺の民家などが多く、内部は23室、一棟に居住部分と家畜舎を入れるものが目立つ。その他円形プランの農村の闘鶏場、皮革工場、道標、教会、境界石、通行税徴収所、ジプシーの車上部屋（移動式）などもある。生活用具もそのままの姿で展示されている。戦後はじまったこの事業はさらに拡充の計画があり、庶民文化財保存への意欲が感じられたのであった。

2・1・6 シュレスウィヒ・ホルシュタイン野外博物館 (Das Schleswig-Holsteinische Freilichtmuseum)

北ドイツのキール郊外モルフゼーの丘陵地を利用したこの野外博物館は、規模としてはスカンセンなどより少し小さい。1961年に開場した新しいもので51棟を集める計画で現在35棟の民家、風車、小屋などが建っている。移築家屋入手および建設中のもの5棟、計画中のもの11棟となっている。案内図は等高線の入った詳密なもので地図では最も優れている。丘陵の起伏を巧みに利用し、高所に風車、低地の沼池畔に漁家を配している。牧場には実際に乳牛を放牧している。シュレスウィヒ・ホルシュタイン地方の小地域別にまとめて民家を配置している。

ドイツの民家型は低ドイツ・中部ドイツ・高地ドイツの3タイプに分けられるが、低ドイツ型はザクセン型とフリース型に分類される。いずれも北ドイツの生活を反映し Einhaus あるいは Einheitshaus で、大きな一棟集中型である。この博物館の民家は低ドイツ型の両タイプが大部分を占めている。例えばザクセン型のホルシュタイン地方の民家の場合、草葺切おとし屋根、妻入の入口を入ると頑丈な骨組のみえるディーレ（広間）があり、桁行の中心軸の両側は牛や馬小舎が並ぶ。広間正面の奥に大きな炉があって、その背後に居室、寝室がある。居住、家畜、農作業場（広間）

が一棟に集まり、大きな屋根裏は納屋となっている。このザクセン型はオランダ東部、低ドイツ西北から中央部へかけてヘッセン北部、ハノーファー、ウエストファーレン、東部のメクレンブルク、北部シュレスウィヒ・ホルシュタインにおよんでいる。フリース型の代表例として Eiderstedt 地方（北海沿岸）の民家が1棟ある。巨大な寄棟屋根で一棟集中型であるが、広間の部分がよく整備され、規模も大きい。その他横に長くのびた一棟集中型の民家。地面すれすれに軒をおろす穀物倉（1690年のもの）が特異な姿をみせている。緑豊かなところ、堆肥の匂いが漂って農村情緒を満喫させてくれる。

2・1・7 ビーレフェルトの民家博物館 (Bauernhaus-museum, Bielefeld)

ビーレフェルトはウエストファリアの中都市で、民家博物館もキールに比べると小規模なものである。環状道路(旧城壁)をぬけ郊外の丘陵地、森になっているなだらかな敷地が民家博物館である。主棟はウムメルマイエルホーフの旧家で、1550年に建てられたザクセン型の代表的なものである。草葺切妻の壮大な屋根で妻側に板を張っている。広間(ディーレ)が大きく、奥に居室が配される。二階が整備されているのがウエストファリア地方の特色である。二階の部屋に民族衣装、階下の広間に農具、家具なども展示している。主棟のほかにドイツ風の台のある風車・水車・穀物倉がある。

2・1・8 その他の野外博物館

以上のほかドイツではボンの郊外にコンメルン野外博物館 (Rheinisches Freilichtmuseum in Kommern) が知られている⁷⁾。ラインランドの近世集落を復原したものを展示しており、鍛冶屋、洗濯屋など各職業の家、教会、風車などが配置され、小高い丘陵の地形が利用されている。まだ復原途上のものもあり、拡充中である。野外博物館の一角にラインランド民芸館がある。

ルーマニアの首都ブカレストの村落博物館 (The Village Museum in Bu

7) 中川成夫：「アジア・ヨーロッパをめぐるII」(『MOUSEION』15, 立教大学1970)

charest) はヘラストラウ湖畔にあり、ルーマニア各地の民家と調度品を集めている。1936年の開場と云われ、17世紀から現在までの218棟の建物が集めてある。主として農家で、その他風車、水車、鐘楼、鍛冶屋などがあり、山地、丘陵、低地にわけ、各地域の環境を考慮して配列してある。東欧では最も充実した野外民家博物館である⁸⁾。

第1表 ヨーロッパの野外民家博物館の比較

	経 営	開 設 年 代	建物数	入場料 (円換算)	そ の 他 設 備
ス カ ン セ ン	(半官 半民)	1891年	130棟 (町屋そ の他含 む)	210円	動物園、遊園地な ど各種、レストラ ンなど多数、室内 展示場、売店
ノ ル ウ ェ ー 民 俗 博 物 館	国 立	1902	150 (小屋を 含む)	150	室内展示場 売店
フ リ ー ラ ン ド ・ ミ ュ ー ゼ ー (コペンハーゲン)	国 立	1935	34 (完成時 74)	100	舞踊、作業風景実 演あり、レストラ ン、売店
ガ ム ル ・ ビ イ (町屋の博物館)	国 立	1914	53	150	レストラン、売店 コレクション展示
シ ュ レ ス ウ イ ヒ ・ ホ ル シ ユ タ イ ン 野 外 博 物 館	州 立	1961	35 (完成時 51)	200	レストラン、売店
ビ ー レ フ エ ル ト 民家博物館	市 立	1917	4	50	主棟は1棟のみ
ウ ェ ー ル ズ 民 俗 博 物 館	国 立	1946	11	100	展示館、売店 レストラン(城内)

* * *

以上のようにヨーロッパの野外民家博物館は早くから着手されており、また新しくあるいは拡充中のものも多く、庶民文化財への深い理解が感じられる。郊外、市中を問わず美しい緑地帯をとりこんだ優れた環境を利用しており、古い姿を保存してその中から生活の知恵を学びとろうとするかのようである。各博物館は大半国公立か半官半民的経営であり、純粹の民家博物館もあるが、民家以外に教会、市場、手工業、牧場その他が集められ、民族衣装をつけた係官など生きた生活ある家をみせようとする努力も

8) 竹浪祥一郎教授の御教示および案内書による。

伺われた。また遊園地を兼ねた一大市民の憩いの場となっているものもあり、地味な博物館であるが利用者の多いことが印象に残る。野外博物館が北歐諸国に比較的多く分布するのは、歴史的記念物が少なく、伝統的な木造家屋の減少、従来の高貴なもの、芸術的なものの陳列に対して庶民的、民芸的な価値の開発という問題。19世紀の民族意識の昂揚などとも関係しているであろう。

2・2 ヨーロッパの街区保存

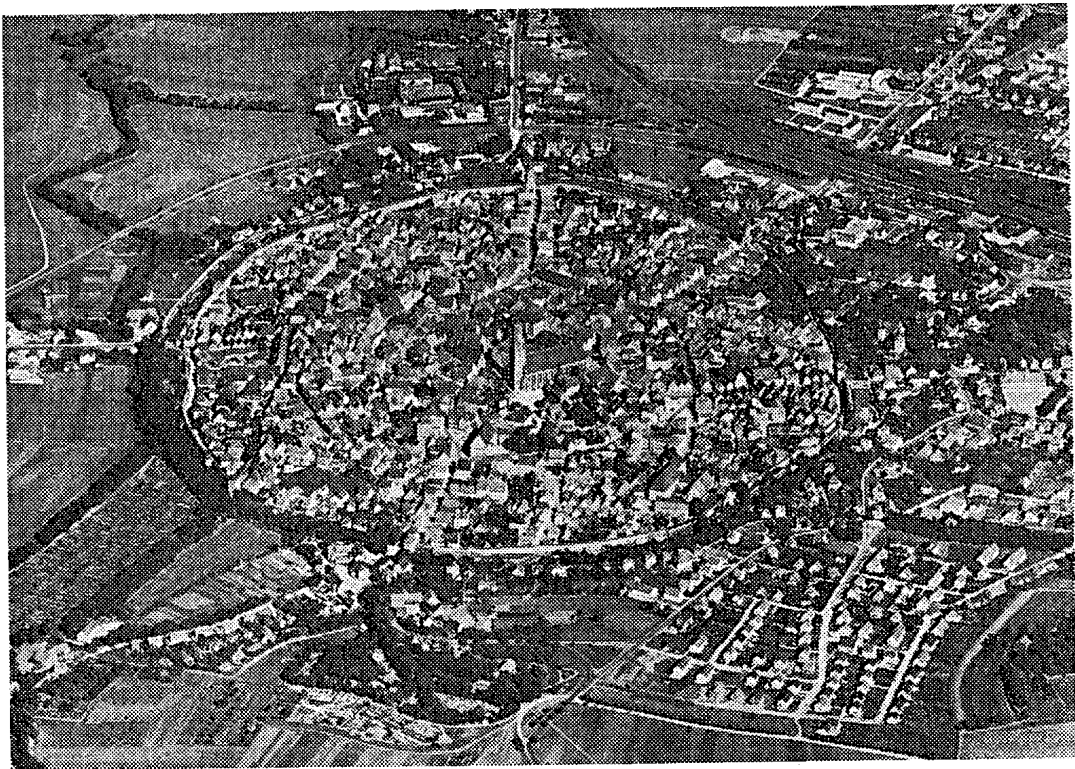
わが国でも最近、個々の民家の保存のみでなく、古い街区や町全体を保存し、歴史的環境を守ろうとする運動がはじまったが、わが国に比べてヨーロッパの場合かなり進展している。イギリスの都市計画法（1968年改正）では古い街区の環境保存が考えられ、フランスではパリのマレ街区などの保存復原工事が「歴史街区保存法」によって進められている。ローマなどは遺跡と同居する都市であって町全体が歴史博物館の感があり、文化財の保存は優秀である。ドイツでもケルン・フランクフルト・ニュルンベルクなど大都市では歴史的環境保全のための規制など検討している。

ニュルンベルクの場合、第2次大戦の戦火は激烈であったが、旧市街や城壁が完成に復原され、薬品まで使って古びた姿を現出しようと努力している。ヨーロッパの多くの町では18世紀頃に建てられた家に平気で住んでおり、たとえ内部は改造しても外装は古形を保持して町全体の歴史的環境のバランスを保つよう心掛けている。したがって中小の地方都市では規制しなくても旧市街は保存されているという。過去が現在に生きているというのか、古きものを現在の生活の基盤として生かしているようである。これは町の歴史的文化の特殊性を保持するという考えが地域住民の精神的支柱になっているとも云えよう。

ヨーロッパではスペインのトレド、ベルギーのガン、イタリアのシエナ、ドイツではフランクフルト南東郊のセリンゲンシュタットとロマンチ

ック街道に沿う中世都市ローテンブルク、デュンケンスビュール、ネルトリンゲンなどが町全体、あるいは一部古い街区が保存されている代表的なものである。その中からネルトリンゲン (Nördlingen) をとりあげてみる⁹⁾。

ネルトリンゲンはミュンヘンから北へ約 150 軒、ロマンチック街道に沿う中世都市であり、円形の城壁に囲まれた旧市街はそのまま保存されてい



写真④ ネルトリンゲン (円形の城壁に囲まれた中世都市)

る。現在 5 つの門があり、各地からの道路が通じて中心部のマルクトプラッツに至る。ここに後期ゴシック式の聖ゲオルグ教会の 90 米の塔がそびえている。人口は 14148 人 (1966) で南ドイツの地方小都市であり、市街地は城壁外にもものびるが、旧市と景観が異なる。

ネルトリンゲンの起源は AD. 500 年頃からこの地に定住したアレマン人によってつくられ、898 年レーゲンスブルクから僧正が来て、市場的機能

9) H. Fehn: 『Topographischer Atlas Bayern』 Paul List, München. (1968)

をもった村に発展したという。1215年南西ドイツ根拠地における一連のホーエンシュタウ家の後援地区となった。この当時の町は当時の環濠〔現在環状道路〕ではっきり復原できる。ネルトリンゲンを通る道路は北伊、アウグスブルク、フランクフルト。ジュネーブ、ボーデン湖、ウルム、中部ドイツなど南北の主要街道にあたり、このような交通上の利点が市場町として商人の活動を活潑にして行く。1219年に始まったネルトリンゲンのイースター見本市、そして14、5世紀には上ドイツの重要な市として毛織物、皮革などが取引されており、1491年の人口は6000人を越えている。しかし15世紀も末期になってニュルンベルクとライプチヒのイースター見本市が発展しはじめてから下火となる。現在の城壁内市街地は1327年～1600年に拡大した部分であり、中世後期のネルトリンゲンの商業全盛期の都市景観が保持されていることになる。以前城壁外に作られた星形の濠は19世紀に取り除かれ、現在ジグザグ道にその跡をとどめている。石畳の道も残っているし、1427年の毛皮工場（1955 焼失）、製皮小路の地名も残っている。皮革工場、織物工場の建物も一部残っている。1600年以後の停滞が、かえって家屋の新築、市街地の拡大を防いだとみることができようし、この街道に位置するローテンブルク、デュンケンスビュールも類似の方向をたどったとみられる。

1849年鉄道が開通したが、城壁外の地域にあり、大きな影響はなかった。ネルトリンゲンはあまり意味のない停滞した農民の町となった。市街地は20世紀初期から城壁外へものびるが、とくに第2次大戦後、旧市と駅の間および東側へ繊維・金属工場、学校、病院、市公会堂などが建った。しかし旧市街は手工業や商店、住宅（農家多し）だけであり、南独特の美しいハーフチンバー、急勾配の切妻屋根の民家が真のドイツらしい景観をみせている。ここでは、特別に規制はないが、住民がたとえ内部を改造しても外装は古い形態を固守し、歴史的環境を保持するというハイマートを愛する心が自然に育成されているように思える。

3 民俗資料 ～大阪市内に残る民俗行事について～

民俗資料は庶民が祖先から伝承してきた日常生活に関する文化財であり、各地域で各々特色をもっている。同類型の民俗資料を比較検討し、その分布を把握することは各民俗資料の性格を明確にする手段であり、これら民俗資料の保存の上からも基礎的な作業である。従来わが国では民俗学の調査研究が多様かつ詳細に各地について集積されてきたが、これらを都道府県、地方、あるいは全国など広域について分類、整理する作業はやっと最近開始されたといつてよい。これは前述したように近年の急速な民俗資料の減少という事態が重要な原因となっている。文化財保護委員会では民俗資料の全国的な基礎資料調査にのりだし、昭和37年から39年にかけて「民俗資料緊急調査」を実施し、これを基礎に「民俗地図」の作成が行なわれはじめたのである¹⁰⁾。

調査は全国統一の調査項目¹¹⁾によって、民俗学関係の調査員を動員し、各都道府県ごとに約30村落を選んで進められた。ただ調査員の質が多様であつて、資料に疎密が目立つなど種々問題が残るが、全国的規模で作成された民俗資料の分布図は基礎資料、概観把握には重要な意味をもち、これを踏切台とした今後の研究発展が期待される。

ここでは大阪市内に残る民俗行事の保存状態について述べようと思う。

大阪府は全国都道府県中最も小さく、ほとんど大都市圏内にあつて都市化が浸透し、民俗資料の調査は困難を極める状況にある。能勢地方や和泉山地など周辺部に若干資料の豊富なところがあるが、これも近年急速に失

10) 文化庁編『日本民俗地図』Ⅰ年中行事1, Ⅱ年中行事2, Ⅲ信仰・社会生活, 1969—1972, (国土地理協会) 以上既刊。

11) 主要項目のみ示す。〔1総観, 2生産暦, 3仕事と用具, 4仕事着, 5染・織, 6毎日の食事, 7赤飯, 餅, だんご, 8住居, 9かまど・いろり, 10社会生活, 11組・講の用具, 12運搬, 13交易, 14一生の儀礼, 15別火・葬制, 16年中行事, 17祭・道祖神など, 18山車・舞台など, 19その他重要なもの, 20コレクション〕

なわれる傾向にある。民俗資料緊急調査では大阪府下30村落について資料が集められたが、それに諸先学の資料と筆者のを加えて最近大阪府の民間信仰についてまとめた¹²⁾。

3・1 大阪市内の民俗行事

大阪市内には神社は145社あるが、住吉大社の「御田植祭」、東住吉区平野杭全神社の「御田植神事」、福島区海老江八坂神社の「宮座」、西成区玉出の生根神社の「だいがく」、四天王寺の「ドヤドヤ」、西淀川区野里の住吉神社の「一夜官女」が民俗行事として、「大阪府の民俗」(1)に詳細に報告されている¹³⁾。そしていずれも現存しているところに大きな意義がある。このうち八坂神社と野里住吉神社は宮座あるいは宮座的行事として行なわれており、第2次大戦という大社会変動の影響を受けながらも、宮座衆の努力によって保存されたものである。

宮座は封建期の農村における神社の特定の氏子だけが特権的、慣習的に祭祀経営に当る組織であり、これを構成している人々の集会と集団をさすが¹⁴⁾、これが村人に解放された村座に至る種々の段階があり、大阪府下についても和泉地方の大越勝秋氏¹⁵⁾や枚方、高槻、茨木、布施（東大阪）市域における高谷重夫¹⁶⁾氏の調査研究がある。

12) 杉本尚次：「大阪府の民間信仰」(『近畿の民間信仰』所収，1973，明玄書房)

13) 沢田四郎作，高谷重夫：『大阪府の民俗』(1) 大阪府文化財調査報告書 第13輯，(1963) 大阪府教育委員会

14) 大越勝秋：「和泉の宮郷の分布と成立」(『人文地理』14—6，pp. 20—36，1962)

15) 大越勝秋：「和泉地方における宮座と血縁性」(『人文地理』19—4，pp. 79—96，1967)

大越勝秋：「和泉における宮座の分布と形態」(『日本民俗学』3—3，pp. 87—95，1956)

大越勝秋：「和泉の寺座の類型」(『日本民俗学会報』11，pp. 10—15，1960)

大越勝秋：「泉州貝塚市の宮座・寺座」1—9 (『近畿民俗』24—37 に連載 1959—1965) その他多数。

16) 布施市史編集委員会編：『布施の民俗』pp. 1—24 (1965)

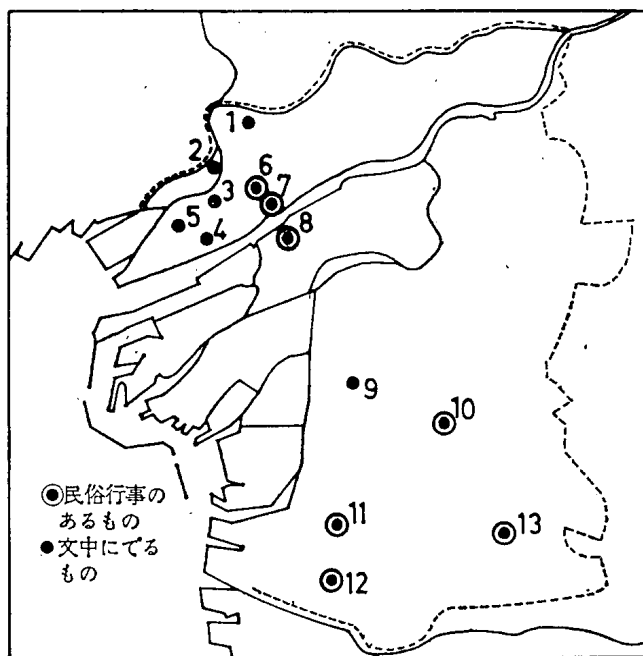
枚方市史編集委員会編：『枚方の民俗』pp. 53—80 (1972)

茨木市史編集委員会編：『茨木市史』pp. 361—364 (1969)

高谷重夫：「成合（高槻市）の宮座」(『社会と伝承』11—2，pp. 25—36，1968)

海老江の八坂神社の場合、近世の庄屋文書が豊富に残され、宮座研究に多くの資料を提供している。現在宮座の行事は「御火焚のオキョウ」と云われ12月15日夜半から16日早朝にかけて行なわれる。

野里住吉神社は、大阪市域発展前摂津国西成郡の一村落の氏神であり、「一夜官女の祭」は摂津名所図絵にも記されている。明治以降都市化にともない宮座組織にも変化が生じ、昭和初期に新来の家を加えて33軒の宮座となった。昭和25年戦災、神社財政の変動で解散した後、氏子中より33名の総代を選び、この中には旧宮座からも数名参加して祭を維持している。当屋は年行司とも称しており、祭日の5日前に抽籤できめられた。昭和34年度は淀川ホテルが当屋になり大広間で御供の準備をしたと



第2図 大阪市内、社寺と民俗行事

- | | |
|-----------|----------|
| 1 香具波志神社 | 2 田蓑神社 |
| 3 大和田住吉神社 | 4 福住吉神社 |
| 5 大野住吉神社 | 6 野里住吉神社 |
| 7 鼻川神社 | 8 八坂神社 |
| 9 今宮戎神社 | 10 四天王寺 |
| 11 生根神社 | 12 住吉大社 |
| 13 平野杭全神社 | |

云う。「一夜官女」となる少女は10才前後の者で家に不浄なく両親の揃ったものが選ばれ、宮座時代には座衆の家から選ばれた。現在では希望者あるいは町内から適当な家の児を出す。2月20日が祭日で、その前日より神供の準備に入る。神饌の調進も数々とりきめがあり、神饌を入れる桶は元禄15年の作といわれる。祭の当日は神社から神職、宮総代などが列を作り「一夜官女」を迎えに当屋に至る。両親に付添われた官女は当屋で修祓を受け、神饌と官女の行列が神社へ向かう。神社では御膳を神殿内に献じ、官女の手に紅白の幣のついた柳の枝を持たせて捧げさせる。

この祭事に類似した祭は大阪府下でも吹田市岸部の吉志部神社の秋祭、高槻市安満の安満神社の春祭などにもみられる。この一夜官女の行事の意義など民俗学的にも種々の問題を提示しているが、日本の神道では淨く若い女性を選んで神に奉仕させた例は多く、神社にみられる巫女もその一例で¹⁷⁾あり、沖縄の司、奄美のノロも女性である。野里の一夜官女もこのような観点から比較考察される必要があるだろう。

これら宮座および宮座的行事は、従来の特権的、家格的なものではなく、座衆（氏子）の家の幸と親睦を願う集会となっており、現在では文化財保存への誇りともなっているようである。

大阪市西成区玉出「生根神社」の7月24、25日の夏祭に出る「だいがく」は昭和47年3月大阪府の重要民俗資料として文化財に指定されたものである（写真⑤）。生根神社はもと大阪市南郊の西成郡勝間（こつま）村の氏神であり、こつま南瓜をはじめとする近郊畑作地帯であった。往昔旱



写真⑤ 生根神社の「だいがく」
（生根神社提供）

害著しく作物枯死寸前の時、住吉の竜神大海神社の前で雨乞の祈願をし、そのため大雨降りそそぎ旱魃は解消した。農民は大いに喜び台をつけて太

17) 沢田四郎作・高谷重夫：「野里の一夜官女」（『大阪府の民俗』1. 所収 pp. 63—72, 1963）

鼓を打ちならし氏地を巡回し感謝したのが「だいがく」の起源と云う。以前は玉出に14台(嘉永の頃という)あり、明治初年には6台あって、町内の対抗意識で喧嘩もあったらしい。一時費用や電線にかかるため廃止したが3台だけ復興し、戦争まで続いたが、戦災で焼失、1台のみ助かり戦後は生根神社で保管して今日に至った。「だいがく」は秋田の「竿燈」と同種のもので1本の竿に多数の提灯を吊したものである。現在は立てておくだけで担がないが、以前は80—100人の人々が担いだと云う。昭和47年重要民俗資料に指定されたのを記念に子供用の「だいがく」を作ったが、これは担いでまわる。20日頃から部材を出して準備し、22日に組立てをはじめ。最近是人夫賃など人件費が嵩むと云う。音頭と太鼓の打ちかたは古老より伝承されつつあり、保存会もできて文化財を保持する意欲にもえている¹⁸⁾。大阪市内の氏神と漁業とに関しては、近世文書や神社の神事、神饌の面から詳しい研究がある¹⁹⁾。大阪市域では旧藩時代、野田村・難波村・九条村・大野村・福村が漁師方五ヶ村組合として公認された漁村であり、佃村・大和田村は東照宮と特別の由緒があり、特権漁村であった。これら漁村は現在市街地であるが、当時淀川デルタに立地する半農半漁的な村落であった。この村々にある神社をみると漁業との関係を伺えるものがある。

海老江の八坂神社の場合、神饌として^{いななます}鰯^{いな}ずしが入っている。鰯は鰯(ボラ)の幼魚であって淡水と海水の交会地帯にいる。野里住吉神社の一夜宮女祭の神饌も鯉・鮒・鯰など川魚が中心となっている。香具波志神社(東淀川区加島町)は初午大祭の神饌に鮒を使う。鼻川神社(西淀川区花川南之町)は10月17—18日例祭に現在氏子総代の代表を当屋として(古くは宮座)、社務所で調饌し、ハマチなどを使っている。住吉神社(西淀川区大和田町)では祀漁祭に古くは漁民が鰯ずしを供えたという。これら

18) 生根神社宮司尾崎虎二、近畿民俗学会長の高谷重夫氏らの御教示を得た。

19) 野村 豊：『漁村の研究——近世大阪の漁村——』(1958、三省堂)

神饌は川魚か川口付近に生棲するものが多く、淀川デルタ地域の漁村であった姿を示しているようである。

住吉神社（西淀川区西福町）、住吉神社（西淀川区大野町）の8月17日の豊漁祭、海神祭は漁協が主体となって行なっているという。田蓑神社（西淀川区佃町）には東照宮祭があって、旧藩時代の特権漁村の面影を伝えている。

著名な大阪の住吉大社も漁民の間で信仰されているが、かつて神供漁場として地先を支配し、難波の漁民が神供漁を担当したと云う。大阪の今宮戎には直接漁民との関係を示す神事はないが、古くは海岸が近く、漁民によって祀られた神であることは否定できない。玉出の生根神社も相殿に蛭子神を祀るが、これは漁師が海で拾った木像の蛭子神であると云われる。堺の出島も大阪湾では埋立地造成前まで大きな漁村であった。この出島には住吉大社に奉納する行事として昭和初期まで鯨踊りがあった。これは昭和29年に復活されたが、費用も多大であり、現在では行なわれない。

4 一つのむすび

以上、野外博物館や街区保存、民俗行事について現況と保存を主に検討したが、民家や街区保存あるいは民俗行事は、庶民の歴史、とくに日常生活を知る手がかりをつくり、また基層文化の解明への糸口を求めることにもなるであろう。民家や古い町の美しさ、民俗資料のもつ祖先の英知、そしてこれらの地域的差異（地方色）も重要である。これら文化財の保存は、研究者のための資料としてだけではなく、国民共通の財産として後世に残す義務がある。ICOMSの決議にもあるように、過去・現在・未来を一体のものとしてとらえる必要があると思う。またヨーロッパに比べてわが国の場合、急速に文化財は失なわれつつあるとはいえ、かなり豊富な資料がある。民家の博物館にしても系統だったより良きものが作り得るの

であるし、国立の民族学博物館設立も迫っている。さらに町ぐるみ保存などにみられるように多数の人々の協力が必要であり、これには当該地域住民の立場を十分に考慮し、一方的な文化財指定に終らぬよう注意しなければならない。このような意味からも、奈良県橿原市今井町にみられるような、盛りあがる地域住民の保存への運動、熱意などを重視しなければならない。これは民俗行事の保存をはじめあらゆる文化財についても云えることであろう。